

ナイトケア通所によって

引きこもりを脱することができた思春期症例

○後藤幸枝（作業療法士）¹⁾ 藤田悦子（音楽療法士）²⁾

医療法人耕仁会札幌太田病院 1) ナイトケア課 2) 作業療法・音楽療法課

【はじめに】

児童期、青年期においては、背景に発達障害がある場合に不登校や引きこもりとなるケースが多い。引きこもりは長期化する可能性もあり、社会参加のための支援が必要となる。本報告では、ナイトケア（以下 NC）の通所によって引きこもりを脱することができた成功事例について、通所時の支援において奏功した点を考察する。

【症例】

10 代後半男性。診断は自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）。幼少期より、人とのコミュニケーションに積極性がない、興味のないことに反応が薄い様子があった。中学入学後、腹痛を訴えて遅刻や早退をすることが増加した。X-4 年 5 月、対人関係のトラブルがあり、完全に不登校となった。通信制高校に進学したが、興味や喜びの喪失、意欲減退などの抑うつ症状より、X 年 3 月に当院へ入院となった。X 年 4 月に退院後、外来通院を継続した。通信制高校のスクーリングやカラオケには時々一人で外出していたが、自宅でゲームやインターネットをして過ごすことが大半であり、引きこもりがちな生活を送っていた。

【経過】

X 年 8 月、NC を導入したが集団プログラムでは「何しているかわからない」と発言し、「ピアノを弾きたい」と希望があった。通所の動機付けのため、個別音楽療法にて本人が好きな楽曲でピアノ練習を開始した。また、本人の興味関心から、職員とゲームを個別に行う時間を設けて通所を促した。X 年 10 月から院内学校、11 月からデイケア（以下 DC）と合同で思春期プログラムを導入し、同世代と交流する経験を持てるよう支援した。集団活動の開始時は、他患の隣に座る、指差しをするなど非言語的なコミュニケーションが中心であったが、自ら質問する様子も観察されるようになった。他院受診のため通所できない期間があると「悲しい」と話し、通所を楽しみにしている様子であった。X+1 年 2 月、本人が DC 通所にも興味を示し、「たくさん通いたい」と希望した。週 3～4 回、DC や NC を利用して就労準備を進める段階に移行できた。

【考察】

通所開始時、NC の集団プログラムに対する反応は前向きでなかったが、次第に通所日数が増え、集団参加が可能となった。ASD の患者では興味が限局的になりやすく、本症例も幼少期よりそのことが指摘されていた。疾患特性をふまえ、本人が興味を持てる音楽とゲームを活用しながら動機付けを行ったことが、通所継続において奏功したと考えられる。また、同世代の他患と場を共にできるプログラムによって、NC が居場所となった可能性がある。しかし、引きこもり支援の変遷を概観した佐藤(2018)は、近年のあり方として、当事者が「居場所」を出て社会参加の試行段階に入るための支援が不十分だと指摘している。本症例においても、本人の興味関心を生かしながら就労を含めた社会参加の可能性を模索していく。

【参考文献】

佐藤隆也:ひきこもり支援の変遷と課題 川崎医療福祉学会誌 28(1), 27-36, 2018